

## 裴李崗文化の墓に関する研究 —中国新石器早期社会に見られる格差—

小 川 誠\*

### Research on the Appearance of Class System Found in Chinese Early Neolithic Society

Makoto OGAWA\*

#### はじめに

裴李崗文化は、河南省を中心に分布する中国新石器早期段階<sup>(1)</sup>の考古学文化である。文化名称として冠された裴李崗遺跡の発掘は、1977年から79年にかけて、計3回に渡り行われた。以後、今日まで、30余年のあいだに発見された同文化の遺跡は、およそ160箇所、試掘・発掘された遺跡は26箇所<sup>(2)</sup>にのぼるといえる。

裴李崗文化の絶対年代は、木炭、草木灰、人骨等の資料から得られた複数遺跡の放射性炭素年代測定値を基に算出されている<sup>(3)</sup>。樊豊実<sup>(4)</sup>は、新石器文化の発展状況を「裴李崗時代」「仰韶

時代」「竜山時代」の3段階に分け、そのうちの「裴李崗時代」を、測定値に従い、今から「9000/8500～7000年前」の時間幅に設定した<sup>(4)</sup>。中国の多くの研究者は、裴李崗文化を、9000年前から7000年前までの約2000年間存続した考古学文化としてとらえている<sup>(5)</sup>。樊豊実が、始まりの時期を9000年前と8500年前の2種類提示しているのは、裴李崗と賈湖の絶対年代中、9000年前後を示す数点の測定結果が古すぎるとして疑義を抱き、同文化の開始年代を8500年前に繰り下げる研究者がいるためである<sup>(6)</sup>。開始時期に見解の相違がある点はさておき、同文化が

\*人文学部 日本文化学科

- (1) ここでいう新石器早期段階とは、最古期の土器が発見された徐水南莊頭等、新石器最早期段階の遺跡を除いた、前仰韶期の新石器文化を指して使っている。裴李崗相当期の考古学文化は、概して、新石器中期として扱われることが多い。最近刊行された、劉慶柱主編『中国考古発現与研究（1949-2009）』（人民出版社、2010年）においても、裴李崗文化を含めた紀元前7000年から5000年の文化を、「新石器時代中期文化」としてまとめている。中国新石器時代の区分に関しては、改めて考える余地を残していることを記しておきたい。
- (2) 楊肇清「裴李崗文化聚落研究」河南省文物考古学会他編『論裴李崗文化 紀年裴李崗文化発現30周年暨學術研討会』科学出版社、2010年、所収、参照。なお、楊論文によるならば、これまでに発見された裴李崗文化の遺構は、住居址109基、灰坑1260基、窯址14基、墓826基を数える。
- (3) 例えば、曹桂岑「裴李崗文化は中原地区新石器時代早期文化—紀年裴李崗文化発現30周年」河南省文物考古学会他編『論裴李崗文化 紀年裴李崗文化発現30周年暨學術研討会』科学出版社、2010年、所収、97頁、表四「裴李崗文化<sup>14</sup>C 測年表」によるならば、測定値は、裴李崗6、沙窩李1、莪溝北崗4、馬良溝1、石固3、中山寨2、水泉2、賈湖19、花窩1の計39を数える。賈湖の数値が約半数を占めるという偏りはあるものの、今のところ、裴李崗文化の絶対年代はこれらの放射性炭素年代測定値を拠り所にして導きだされている。
- (4) 樊豊実「試論裴李崗文化与周辺地区同時期文化的關係及其發展去向」河南省文物考古学会他編『論裴李崗文化 紀年裴李崗文化発現30周年暨學術研討会』科学出版社、2010年、所収。
- (5) 参考文献は省略するが、裴李崗文化の存続時期を、9000年前から7000年前とする研究者には、許順湛、楊育彬、曹桂岑、張松林などの諸氏がいる。

1500年から2000年の長期間、河南省中央部を中心に栄えたこと、その後、仰韶期の文化に移行していったこと、以上の2点については、ゆるぎのない事実として確認されている。

筆者は、農耕を営み始めて間もない新石器の早期段階に、階層性の萌芽が認められるか否かを、裴李崗文化の代表的な遺跡である賈湖の墓群(349基)を通して検討したことがある<sup>(7)</sup>。結果として、そこには、社会通念上の現象として日常的にあらわれてくるであろう個人差をこえた格差、すなわち社会的な階層差が、限られた時間ではあるが存在したことを論証した。

本論の目的は、裴李崗文化の他の主要遺跡に考察対象を広げることで、階層出現の兆しが見られるのか、あるいは、それが賈湖遺跡に限定された特殊な事象であったのかを検証することにある。仮に、賈湖以外の遺跡で、同じとはいわないまでも、あるいは一時的なものではあるにせよ、似たような状況が観察されるならば、社会的な格差の出現を裴李崗文化全体に関わる現象として普遍化することができる。

資料は、賈湖の場合と同じく墓(墓群)とする。墓は文字のない社会にあって一人の人間を

特定できる唯一の遺構であり、ある人物が生きてきた状況、ある人物の生前の生活を色濃く反映している。格差の存在を調べるうえで格好の材料といえる。観察対象とする遺跡と墓群(括弧内)は、新鄭市裴李崗(裴李崗下層墓・上層墓)<sup>(8)</sup>、新鄭市沙窩李(沙窩李下層墓・上層墓)<sup>(9)</sup>、新密市荻溝北崗(荻溝北崗墓)<sup>(10)</sup>、長葛市石固(石固Ⅰ期墓・Ⅱ期墓・Ⅲ期墓・Ⅳ期墓)<sup>(11)</sup>、郊県水泉(水泉墓)<sup>(12)</sup>の5遺跡である<sup>(13)</sup>。裴李崗文化の諸遺跡は、河南省中央部で集中的に発見されており<sup>(14)</sup>、上記の5遺跡も、およそ半径50 km 圏内の遺跡密集地に収まるように分布する。そこは、河南省西部の山並みが途切れ、東部の平原へ移行する淮河水系上流地帯にあたる。ちなみに、前回考察の対象とした舞陽県賈湖遺跡は、これらの5遺跡からやや南に隔たった場所に位置している。

ところで、これらの5遺跡で発掘された墓地を観察していくにあたっては、裴李崗文化における各墓群の相対年代関係を調べておく必要がある。以下、先行研究を簡潔に紹介しておくたい。

方孝廉は、沙窩李、荻溝北崗、裴李崗の3遺跡を中心に据えて、裴李崗文化を第一期から第

(6) 靳松安「試論裴李崗文化的分期和類型」『東方考古』第6集、2009年、参照。これと同じ論文が、河南省文物考古学会他編『論裴李崗文化 紀年裴李崗文化發現30周年暨學術研討會』科学出版社、2010年、に再録されている。また、『中原文物』2007年第6期掲載の靳松安「試論裴李崗文化的分期与年代」は、上掲論文の図表を省略したもので内容は同一である。

(7) 小川誠「賈湖遺跡墓群の研究—中国新石器時代早期社会に見られる格差—」『駒沢女子大学研究紀要』第17号、2010年。

(8) 裴李崗遺跡の報告には以下のものがある。①中国社会科学院考古研究所河南一隊「1979年裴李崗遺址発掘報告」『考古学報』1984年第1期、②中国社会科学院考古研究所河南一隊「1979年裴李崗遺址発掘簡報」『考古』1982年第4期、③開封地区文物管理委員会・新鄭県文物管理委員会・鄭州大学歴史系考古専業「裴李崗遺址一九七八年発掘簡報」『考古』1979年第3期、④薛文燦「発掘裴李崗遺址又有新收穫」『河南文博通訊』1979年第3期、⑤開封地区文管会・新鄭県文管会「河南新鄭裴李崗新石器時代遺址」『考古』1978年第2期。

(9) 沙窩李遺跡の報告には以下のものがある。①中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南新鄭沙窩李新石器時代遺址」『考古』1983年第12期、②薛文燦「沙窩李新石器時代遺址調査」『中原文物』1982年第2期。

(10) 荻溝北崗遺跡の報告には以下のものがある。①河南省博物館・密県文化館「河南密県荻溝北崗新石器時代遺址」『考古学集刊』第1集1981年、②河南省博物館・密県文化館「河南密県荻溝北崗新石器時代遺址発掘簡報」『文物』1979年第5期、③河南省博物館・密県文化館「河南密県荻溝北崗新石器時代遺址発掘報告」『河南文博通訊』1979年第3期。

(11) 石固遺跡の報告には以下のものがある。河南省文物研究所「長葛石固遺址発掘報告」『華夏考古』1987年第1期。

(12) 水泉遺跡の報告には以下のものがある。①中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南郊県水泉裴李崗文化遺址」『考古学報』1995年第1期、②郊県文化館「河南郊県水泉発現の新石器時代遺址」『考古』1979年第6期。

(13) 各遺跡の所属市県は、発掘当時のものではなく現在の行政区画による。

(14) 国家文物局『中国文物地図集 河南分冊』中国地図出版社、1991年、30-31頁、河南省裴李崗文化遺址図、参照。

四期までの4期に分期した(4期編年/1986年)<sup>(15)</sup>。一方、繆雅娟は、沙窩李遺跡の発掘成果を基に、裴李崗文化を早期・中期・晩期の3段階に編年した(3期編年/1993年)<sup>(16)</sup>。また、張江凱は、土器形態の比較分析から、裴李崗文化を早期・中期・晩期に分けたうえで、中期を3段(中期一段・中期二段・中期三段)、晩期を2段(晩期四段・晩期五段)に細分化する編年案を提示した(3期6段編年/1997年)<sup>(17)</sup>。

これらの研究を受け、靳松安は、詳細な報告が得られる6遺跡(石固・裴李崗・水泉・賈湖・裴溝北崗・沙窩李)を基準にした6段編年(第1段～第6段)を提案する(3期6段編年/2009年)<sup>(18)</sup>。各段の整合性は、裴李崗文化を代表する土器である、双耳壺、三足鉢、深腹罐、鉢形器の形態比較により裏打ちされ、また主要6遺跡以外の諸遺跡に関しても、出土土器を掘り所に各期段への帰属をあきらかにするなど、編年は細密かつ網羅的になされている。このように、6段に及ぶ靳編年であるが、最終的には、隣接する各段の土器の類縁性を考慮し、第1段と第2段を早期、第3段と第4段を中期、第5段と第6段を晩期とし、早中晩の各時期は、裴李崗文化の異なる発展段階をあらわしたものと結論づけている。

以上の編年研究を基に、本論で扱う5遺跡の墓群を時間軸上に位置づけるならば、研究者間の分期の異同をこえ、裴李崗上層墓、沙窩李下

層墓、裴溝北崗墓、石固Ⅲ期墓、水泉墓、以上の5群が、裴李崗文化盛行期の墓の中核をなしていたとみなすことができる。そこから外れる、裴李崗下層墓、石固Ⅰ期墓、石固Ⅱ期墓はそれらに先行する墓群、沙窩李上層墓、石固Ⅲ期墓の一部と石固Ⅳ期墓はそれらに後続する墓群としてそれぞれを括ることができる。5遺跡の墓は3段階に分かれることになる。これを前提として、以下の本文で各遺跡の墓を分析していきたい。

### 1. 裴李崗遺跡の墓

裴李崗遺跡は、小河川が集落の西側と南側を屈曲しながら流れる、高さ約25mの台地上に立地する。都合3回に及ぶ発掘の結果、遺跡からは114基の墓が検出された。各発掘における墓数は、第1次発掘8基、第2次発掘24基、第3次発掘82基である。当遺跡の文化内容に早晩の別があることは、第2次発掘の報告で指摘されている<sup>(19)</sup>。しかし、上層と下層という言葉を用いて、墓や出土土器を兩層の文化に分けて認識するようになったのは第3次発掘以降のことである<sup>(20)</sup>。第1次と第2次の発掘で発見された墓32基に関しては、上層、下層のいずれに属するのか不明とされる<sup>(21)</sup>。したがって、帰属時期がわかるのは、第3次発掘で検出された墓82基に限られる。その内訳は、上層墓70基、下層墓12基である。

(15) 方孝廉「裴李崗文化陶器分期和年代分析」河南省考古学会他編『論仰韶文化』中原文物1986年特刊、第5号、所収。

(16) 繆雅娟「沙窩李遺址分析—試論裴李崗文化分期」『考古』1993年第9期。

(17) 張江凱「裴李崗文化陶器的系譜研究」『考古与文物』1997年第5期。張論文で提示される「裴李崗文化墓葬編年表」は、各遺跡の墓の相対年代関係を知るために有益である。本論でも随時参照した。ところで、繆雅娟、張江凱はともに裴李崗文化を3時期に編年する立場をとっているが、前者は裴李崗下層墓を早期に、後者は同墓群を中期一段に入れる等、若干のずれがうかがえる。これは、繆編年では扱わない石固遺跡のⅠ期墓を、張編年では早期に繰り入れたために生じたものである。また、裴李崗文化を4期に分ける方編年の第一期から第三期までは、繆編年の早期・中期・晩期に概ね該当する。最終段階にあたる第四期に沙窩李や裴溝北崗の一部の灰坑を入れ、4期編年を確立しているところに方編年の特徴がうかがえる。

(18) 注6、靳松安、2009年論文、参照。

(19) 注8、③開封地区文物管理委員会、1979年報告、205頁、参照。

(20) 注8、①中国社会科学院考古研究所河南一隊、1984年報告、参照。

(21) 注8、①中国社会科学院考古研究所河南一隊、1984年報告、45頁、脚注6)、参照。

当遺跡の墓は、長方形堅穴土坑墓を主流とする。装具は発見されていない。38号墓(下層墓)が2人合葬である以外、全てが単葬である。方向は、西に若干偏るものも散見されるが、ほぼ南向きで統一されている。墓は、中央やや西寄りを南北に走る空白帯を残して、東西で密集して分布するが、墓坑が重なる事例は7件と数少ない。一部を除き、墓穴を破壊するのを避けて埋葬行為が行われた様子がうかがえる。中央の空白帯は、現地住民が丘の脊梁部を掘削して平らにならしたあとらしく、報告者はその時点で遺跡は破壊されたとみなしている。裴李崗の墓群は、元来、単人の堅穴土坑墓が密集し、ひとまとまりの広大な墓地を形成していたことになる。

裴李崗遺跡のそれぞれの墓のあいだにはどの程度の違いが存在したのであろうか。最も客観化しやすい墓の大きさと副葬品の点数を調べてみたい。

第3次発掘の成果である上下層に分期された墓82基の墓坑長平均値は2.10 m、墓坑幅平均値は0.93 m、墓坑面積平均値は2.00 m<sup>2</sup>である。これを上層墓、下層墓別に平均を算出してみると、上層墓(70基)は、坑長2.09 m、坑幅0.92 m、面積1.97 m<sup>2</sup>、下層墓(12基)は、坑長2.13 m、坑幅1.01 m、面積2.22 m<sup>2</sup>となる。上層墓よりも下層墓の方が各項目の平均値が大きい。これは、数の少ない下層墓のなかに、坑長2.6 m、坑幅2.1 m、面積5.46 m<sup>2</sup>の大型2人合葬墓が含まれているためである。これを抜かした下層墓の平均値は、坑長2.09 m、坑幅0.91 m、面積1.92 m<sup>2</sup>であり、上層墓と大体同じ大きさになる。なお、第1次と第2次で発掘された墓32基を加えた114基の全体平均値は、坑長2.09 m、坑幅0.94 m、面積1.99 m<sup>2</sup>である。

次に、副葬された遺物の点数を計算してみると、墓群全体114基の平均値は3.76点となる。上下層に分期された第3次発掘の墓群82基に絞

ると、平均は3.21、そのうち上層墓(70基)の平均は2.86、下層墓(12基)の平均は5.25である。墓の大きさのときと同じく下層墓の点数が多く出ているので、ここから、計14点の副葬品が出土した2人合葬墓1基を除いて計算し直すと、下層墓の平均は4.45となる。今回は、墓の規模とは異なり、下層墓が上層墓の平均値を上回る結果となっている。

以上、墓の大きさと副葬品点数の平均値を紹介した。それでは、墓坑や副葬品が平均値よりも極端に上回る例があるのかどうかを見ていきたい。今、114基の墓を、面積1 m<sup>2</sup>刻みに振り分けてみる(表1)。結果は、小さい方から、0.99 m<sup>2</sup>以下、5基、1.00～1.99 m<sup>2</sup>、66基、2.00～2.99 m<sup>2</sup>、35基、3.00～3.99 m<sup>2</sup>、2基、4.00～4.99 m<sup>2</sup>、3基、5.00 m<sup>2</sup>以上、1基、不明2基となる。1.00～2.99 m<sup>2</sup>のあいだに101基、全体の88.6%が集まってくる。

注目すべきは、約9割のなかに入っていない墓、特に、全体の5.3%を占める面積3.00 m<sup>2</sup>以上の墓6基である。これらの墓は、墓坑面積が平均を大きくこえている。最も小さい43号墓(上層墓)ですら3.08 m<sup>2</sup>、全体平均値1.99 m<sup>2</sup>の1.5倍強の大きさである。帰属時期は、上層墓3基、下層墓1基、不明墓2基となり、第3次発掘墓のなかでは上層墓が若干多い。

もうひとつの指標として使った副葬品の点数

表1 裴李崗遺跡墓坑面積と墓数一覧

面積 m <sup>2</sup>	墓数
0.99以下	5
1.00～1.99	66
2.00～2.99	35
3.00～3.99	2
4.00～4.99	3
5.00以上	1
不明	2
計	114

についても、同じように観察してみたい。まず、副葬品の点数を少ない方から順に並べ、該当する墓の数を記載していくと表2のようになる。最も多いのは2点（27基）、そして1点（24基）、3点（16基）がこれに続く。上位3位で全体の58.8%を占めている。裴李崗の村では、埋葬時に1点から3点の副葬品を添えることが通例化していたらしい。さらに分析を進めてみると、副葬品0点から5点の墓は計86基、6点から9点の墓は計21基、副葬品が一桁9点以内の墓は全体の93.9%を占めていた。どこからを副葬品が多いと認識するかは主観の問題であるが、面積3.00 m<sup>2</sup>以上の墓が全体の5.3%を占めていたことを勘案するならば、占有率の比較から、副葬品10点以上が当墓地のなかの厚葬墓ということになろう。ちなみに、10点以上を副葬した墓は6基（14号墓・15号墓・22号墓・27号墓・38号墓・100号墓）、全体の5.3%にあたる。38号墓と100号墓が下層墓である以外、所属時期はわからない。埋葬点数はそれぞれ、10点、24点、10点、

19点、14点、10点となる。24点が最多である。

以上の分析から、裴李崗の墓地では、全体の約5%の墓に、大型と厚葬という他を凌駕する状況がうかがえることが判明した。ただし、墓の大きさと副葬品の点数は必ずしも厳格な相関性を示していない。墓坑面積の大きい6基の墓の副葬品点数をあげると、15号墓24点、27号墓19点、38号墓14点、43号墓1点、54号墓7点、67号墓9点というように、6期中3基が10点に満たない。裴李崗の墓群中、墓坑面積と副葬品点数の両面から他の墓との強い差異性がうかがわれるのは、15号墓（24点）、27号墓（19点）、38号墓（14点）の3基である。前2者は帰属不明の単葬墓、残りの38号墓は下層に属する2人合葬墓である。

ここにおいて、墓の大きさと副葬品の点数から、3基の大型厚葬墓が浮かび上がってきた。15号墓は墓坑面積4.5 m<sup>2</sup>、副葬品24点、27号墓は墓坑面積4.5 m<sup>2</sup>、副葬品19点、どちらにも、石磨盤、石磨棒、双耳壺、三足鉢、深腹罐といった裴李崗遺跡を代表する品物が添えられていた。38号墓は墓坑面積こそ5.46 m<sup>2</sup>と前2者より大きいものの、副葬品の数は14点にとどまる。当墓は2人合葬であるため、1人あたりに換算すると7点ということになる。ただし、石磨盤、石磨棒、双耳壺、三足鉢、深腹罐以外に、石斧、石鎌、石鏟など石器の種類が多いところは特徴的である。

このように、裴李崗の村落では、あきらかに普通の人よりも大きな墓穴を掘り、多くの物品を納めた墓が存在していたのだが、これだけでは、集団墓地に大型厚葬墓が混在していた事実を指摘したに過ぎない。裴李崗の村落社会全体に、格差を意識した埋葬行為が認められることを証明するためには、もう少し別の要素を絡ませていく必要がある。ここでは、土器を素材として検討を続けてみたい。

表2 裴李崗遺跡副葬品点数と墓数一覧

点数	墓数
0	3
1	24
2	27
3	16
4	9
5	7
6	11
7	4
8	3
9	3
10	3
14	1
19	1
24	1
不明	1
計	114

裴李崗遺跡の土器は、泥質紅陶（67.89%）と夾砂紅陶（29.36%）で全体の97.25%が占められている<sup>(22)</sup>。製作法は手制で、文様は一部を除きほとんど付けられていない。赤みがかった胎土をもつ無文の土器が多く作られていたことになる。器種は、双耳壺・三足鉢・深腹罐・鉢形器の4種を主流としていた<sup>(23)</sup>（図1）。新石器の早期段階であるがゆえに、土器の種類はまだ少ない。

報告書によるならば、裴李崗遺跡の全出土土器中、最も数が多いのは双耳壺である。三足鉢がこれに続く。両器種の出土状況をまとめると

表3のようになる<sup>(24)</sup>。双耳壺は、裴李崗遺跡の墓114基中、95基で出土している。第1次発掘7基、第2次発掘21基、第3次発掘67基の計95基である。出土率は83.3%、4基うちの3基に見られる確率である。これに対して三足鉢は、114基中44基で出土した。第1次発掘3基、第2次発掘12基、第3次発掘29基の計44基である。出土率は38.6%となる。

両者を比較してみると、双耳壺埋納墓が三足鉢埋納墓の倍以上の数検出されている<sup>(25)</sup>。つまり、三足鉢が埋納された墓は双耳壺が埋納された墓の半数以下しかないことになる。ところ

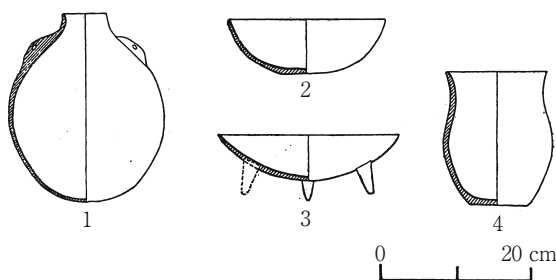


図1 裴李崗遺跡出土土器

1. 双耳壺 2. 鉢形器 3. 三足鉢 4. 深腹罐

表3 裴李崗遺跡双耳壺・三足鉢出土状況一覧1

	双耳壺		三足鉢	
	墓数	点数	墓数	点数
第1次発掘	7	7	3	3
第2次発掘	21	22	12	51
第3次発掘	67	76	29	50
計	95	105	44	104

(22) 注8、①中国社会科学院考古研究所河南一隊、1984年報告、38頁、参照。紅陶系の土器が大多数を占める現象は他の遺跡でも観察される。例えば、莪溝北崗は、泥質紅陶21.85%、夾砂紅褐陶77.62%、両者合わせて99.47%（注10、①河南省博物館・密県文化館、1981年報告、8頁、参照）、石固Ⅲ期は、泥質紅陶47%、夾砂棕紅陶52%、両者合わせて99%（注11、河南省文物研究所、1987年報告、32頁、参照）、また、水泉に関しては統計がとられていないが、墓群が観察される水泉Ⅱ期の場合、泥質と夾砂の土器のほとんどが紅陶であるという（注12、①中国社会科学院考古研究所河南一隊、1995年報告、57頁、参照）。

(23) 器種名称に関して、報告書によっては、「三足鉢」を「三足器」「鼎」、「双耳壺」を「壺」「圜底壺」、「鉢形器」を「平底鉢」などと称する場合もあるが、本論は一貫して、三足鉢・双耳壺・深腹罐・鉢形器の名称を使うことにする。

(24) 本論では、第3次発掘で報告される三足壺と圜足壺を双耳壺の統計値に加えている。両器種ともに、丸底の壺に短三足及び仮圜足を付けた土器であり、壺部の形態は双耳壺と同じである。三足壺5点、圜足壺3点というように出土数も少ない。また、第2次発掘では、圜足壺を双耳壺と同じ「壺」として型式分類している。両器種を双耳壺の仲間に加えたのはこのような理由による。

が、土器自体の埋納点数は、三足鉢104点、双耳壺105点というように（表3）、両器種同数に近い。三足鉢は44基の墓に104点、双耳壺は95基の墓に105点、墓1基あたりの平均値で比べると、前者は2.4点、後者は1.1点となる。墓の数は少ないにもかかわらず土器の数は多い。これは、三足鉢を複数埋納する事例が多かったことをあらわしている。

そのあたりを詳しく見たのが表4である。双耳壺は副葬数1点の墓が86基、双耳壺埋葬墓中の90.5%、2点の墓が8基、同8.4%、3点の墓が1基、同1.1%である。これに対して、三足鉢は、副葬数1点の墓が22基、三足鉢副葬墓中の50.0%、2点の墓が13基、同29.5%、3点の墓が3基、同6.8%、4点の墓が4基、同9.1%、それに13点と18点の墓が1基ずつ存在する。三足鉢を複数揃えた墓が多いことは、この数値からも証明される。

どうも、裴李崗の墓には、三足鉢の副葬点数をもって埋葬された人物の格付けを行っていた形跡がある。三足鉢はあくまでも日常の容器であり、供献や葬送等、非日常の用途のために特別にしつらえた器ではない。したがって、三足

鉢が、生前の人物の格式を表現するための儀器に転用される必然性は見いだせないのだが、表4の出土状況を見る限り、そこには、三足鉢の数をもって何かをあらわそうとした、死者を送る人たちの意図が隠されているような気がしてならない。さらにいうならば、そこからは、歴史時代になって広く行われた「列鼎制度」が連想される。これになぞらえるならば、裴李崗の墓には、「列鉢制度」なるものが存在したということになるだろう。ここには、階層的秩序制度誕生のきざしがある。

具体的にどのような序列づけが行われていたのか、表4を基に復元してみると、1鉢墓、2鉢墓、3鉢墓、4鉢墓、多鉢墓の5階級、もしくは、3鉢墓と4鉢墓をいっしょにした4階級ぐらいが想定できる。改めて墓の件数を記しておく、1鉢墓22基、2鉢墓13基、3鉢墓3基、4鉢墓4基、多鉢墓2基である。多鉢墓は、13点1基、18点1基という内容である。

続いて、三足鉢の副葬状況と先般指摘した大型厚葬墓3基との関わりを検証する（表5上3

表5 裴李崗遺跡三足鉢出土墓と墓坑面積・副葬品点数関係一覧

	墓号	面積 m <sup>2</sup>	副葬品 点数	三足鉢 点数
①	15号墓	4.50	24	18
②	27号墓	4.50	19	13
③	38号墓	5.46	14	4
④	14号墓	1.17	10	4
⑤	22号墓	1.88	10	4
⑥	76号墓	2.64	6	3
⑦	87号墓	1.77	7	3
⑧	108号墓	1.90	6	3
⑨	110号墓	2.78	9	4

表4 裴李崗遺跡双耳壺・三足鉢出土状況一覧2

副葬 点数	双耳壺 墓数	三足鉢 墓数
1	86	22
2	8	13
3	1	3
4	0	4
13	0	1
18	0	1
計	95	44

(25)三足鉢埋納墓44基のうち41基の墓に双耳壺が埋められていた。すなわち、三足鉢埋納墓の93.2%に双耳壺との共存現象がうかがえる。逆に、双耳壺の側から見ると95基中41基、43.2%の墓に双耳壺と三足鉢の両者が共存していたことになる。双耳壺は三足鉢を意識せずに埋葬されることがあったのに対し、三足鉢は双耳壺と合わせて埋めることを前提にしていた可能性がある。興味深い現象である。

列)。結果は、①15号墓、墓坑面積4.50 m<sup>2</sup>、副葬品24点、三足鉢18点（多鉢墓）、②27号墓、墓坑面積4.50 m<sup>2</sup>、副葬品19点、三足鉢13点（多鉢墓）、③38号墓、墓坑面積5.46 m<sup>2</sup>、副葬品14点、三足鉢4点（4鉢墓）となる。3基確認されている大型厚葬墓は、「列鉢制度」上、最上位の格に位置づけられるものばかりである。

他方、三足鉢を3点以上伴う上記以外の墓については（表5下6列）、④14号墓、墓坑面積1.17 m<sup>2</sup>、副葬品10点、三足鉢4点（4鉢墓）、⑤22号墓、墓坑面積1.88 m<sup>2</sup>、副葬品10点、三足鉢4点（4鉢墓）、⑥76号墓、墓坑面積2.64 m<sup>2</sup>、副葬品6点、三足鉢3点（3鉢墓）、⑦87号墓、墓坑面積1.77 m<sup>2</sup>、副葬品7点、三足鉢3点（3鉢墓）、⑧108号墓、墓坑面積1.90 m<sup>2</sup>、副葬品6点、三足鉢3点（3鉢墓）、⑨110号墓、墓坑面積2.78 m<sup>2</sup>、副葬品9点、三足鉢4点（4鉢墓）、以上のごとくである。大型厚葬墓を除いた④から⑨までの6基に関して、墓坑面積は⑥の76号墓を除いて平均（1.99 m<sup>2</sup>）よりも小さい値を示すが、副葬品の点数は全てが平均（3.78点）をこえている。すなわち、三足鉢を3点以上埋葬した墓は、厚葬の風が強いといえる。それが最大限あらわれたのが、①から③までの3基ということになる。裴李崗遺跡において、三足鉢の副葬点数により死者の生前における階層差をあらわそうとする行為が行われた可能性は高い

といえるであろう<sup>(26)</sup>。

## 2. 他の主要遺跡の墓

### 2-1. 沙窩李遺跡

裴李崗と同じく新鄭市に位置する沙窩李遺跡は、湾曲する河川を臨む、高さおよそ25 mの台地上に立地する。1972年に石器や土器が発見されたことを契機とし、その後、1981年に調査と試掘、1982年に正式な発掘が行われた。墓は全部で32基検出された。それらは、上下両層に分かれ、上層墓は15基、下層墓は17基を数える。層位差は大変明確であるという。上下両層の墓ともに頭を南に向けて整然と配列されていた。いずれも単葬の長方形堅穴土坑墓で、装具は使っていない。

裴李崗と沙窩李ともに墓の作り方に大きな相違はうかがえない。出土土器も紅陶素面を主とし、三足鉢、双耳壺、深腹罐、鉢形器の4器種が多くを占めていた。しかし、相違点も見受けられる。ひとつは、裴李崗と比べ沙窩李の方が墓坑をいくらか大きめに作っていた点、もうひとつは、前章で問題にした三足鉢埋葬墓が沙窩李ではほとんど見られないことである。

墓の大きさに関して、墓坑面積で比較すると、裴李崗が平均値1.99 m<sup>2</sup>であったのに対して、沙窩李は2.40 m<sup>2</sup>である（表6）。長さ幅ともに少しゆったり目に作られている。ちなみに、沙

表6 裴李崗文化遺跡の墓坑規墓と副葬品点数比較一覧

	坑長 m	坑幅 m	面積 m <sup>2</sup>	副葬品 点数
裴李崗	2.09	0.94	1.99	3.76
沙窩李	2.26	1.04	2.40	4.13
荻溝北崗	2.04	0.72	1.49	3.90
石固	1.68	0.60	1.02	1.88
水泉	1.93	0.89	1.72	4.38

(26)本来であれば、三足鉢の型式差を含めて論じるべきであろうが、三足鉢が18点入れられた15号墓は12点が残器、13点入れられた27号墓は10点が残器となっており、型式差から何らかの結論を導きだすことは難しい。



窩李の墓坑平均面積は、本論でとりあげる5遺跡のなかで最も大きい。

また、三足鉢を埋葬した墓は、裴李崗では全墓の38.6%あったのに対して、沙窩李では、3号墓（下層）、29号墓（下層）、31号墓（下層）の3基、9.4%しか見当たらない。それらの墓坑面積と副葬品点数を調べると、3号墓は3.12 m<sup>2</sup>、10点、29号墓は3.89 m<sup>2</sup>、6点、31号墓は2.55 m<sup>2</sup>、8点となる。3基ともに下層に属するので、下層墓17基中の順位を調べてみると、面積は、5位、2位、11位、副葬品点数は、1位、3位、2位となる。ここからは、三足鉢が副葬品の点数の多い墓に納められていた状況が、かろうじて観察される。

当遺跡の墓の最大の特徴は、石器を副葬した事例が多いことである<sup>(27)</sup>。全32基中11基、34.4%が石器のみを埋納した墓となっている。内訳は、上層8基、下層3基である。上層墓においては、全15基中8基（53.3%）が石器単独埋葬墓であった。下層墓が17.6%であったのと比較すると、格段に多くなっている。

ただし、石器単独埋葬墓における石器の出土点数自体はあまり多くない。6点1基、3点2基、2点3基、1点5基である。副葬品点数の平均が4.13であるから、1基以外は平均以下の数である。何故、石器のみを埋葬した墓が多いのか。これは格差というよりも、当集落の人々の生前の生き方に深く関与していたことが想定できる。最大の副葬品点数を誇る19号墓（上層）において、24点中23点が石器であったこと、32基の墓のうち土器だけを副葬品とした墓が4基のみであること、裏を返せば32基中28基に石器

が副葬されていた事実も、当遺跡の住人と石器との深い関わりを暗示しているように思える。いずれにしろ、当遺跡の墓からは、裴李崗で見られたような格差の存在をうかがうことはできなかった。

## 2-2. 莪溝北崗遺跡

莪溝北崗遺跡は、河川の合流地点から70 mほど登った丘の上に立地する。当遺跡は1975年の踏査時に発見され、1977年と78年の2回に渡って発掘が行われた。墓は68基が検出されている。墓の一部に重複関係を認めるが、報告者は、副葬された器物の形態を見て、全て同一時期に属するものと判断している<sup>(28)</sup>。

墓の方向は、190度から225度のあいだ、若干西に振れた南向きである。墓坑は長方形堅穴を呈する。ただし、68基中9基に壁龕が認められた。壁龕は、9基のうち4基が人骨左側の中央、3基が人骨左側の下部、2基が人骨右側の中央に掘られている。高さ20～40 cm、奥行20 cm程度の大きさで、そこには一括して埋葬品が納められていた。葬法は単人の仰身直肢葬である。ただし例外的に、2人合葬墓が1基含まれる。

墓坑の大きさは、平均面積1.49 m<sup>2</sup>を測る<sup>(29)</sup>。裴李崗（1.99 m<sup>2</sup>）よりも小型の作りである（表6）。裴李崗と莪溝北崗では、墓坑の長さはそれほどかわらないのだが、坑幅を見ると、裴李崗が0.94 mであったのに対して、莪溝北崗は0.72 mとかなり狭くなっている。前出の沙窩李が平均1.04 mであったのと比較すると7割程度の幅である。

裴李崗と同じく、墓の大きさと副葬品点数の

(27) 報告者も沙窩李の墓の副葬品に石器が多いことを認めている。それによると、副葬品133点のなかで石器は83点、64%を占めているという（注9、①中国社会科学院考古研究所河南一隊、1983年報告、1065頁、参照）。

(28) 注10、①河南省博物館・密県文化館、1981年報告、12頁、参照。

(29) 莪溝北崗遺跡では、68基のうち18基（2号墓～19号墓）の墓坑の大きさが紹介されていない。したがって、平均値は、18基を除いた50基から算出している。

状況を調べてみたい。墓坑面積は、大きさのわかる50基のうち43基（86.0％）が1.00から1.99 m<sup>2</sup>の範囲に収まっている（表7）。それよりも小さい墓は3基、大きい墓は4基ある。大型墓4基のなかでは、2人合葬墓である61号墓が3.64 m<sup>2</sup>と最大値を示す。残りの3基は、34号墓が3.19 m<sup>2</sup>、31号墓が2.05 m<sup>2</sup>、33号墓が3.19 m<sup>2</sup>である。

一方、副葬品の点数は表8に示すとおりである。2点10基、3点14基、4点11基というように、副葬品2点から4点の墓が約半数を占めている。残りは全て1桁台である。ここで、表8中14点が検出された2基（34号墓・61号墓）を厚葬墓とみなし、両墓の墓坑面積を調べてみると、それぞれ3.19 m<sup>2</sup>と3.64 m<sup>2</sup>、全体の2位と1位を占める。我溝北岡では、これらの2基が

表7 我溝北岡遺跡墓坑面積と墓数一覧

面積 m <sup>2</sup>	墓数
0.99以下	3
1.00～1.99	43
2.00～2.99	2
3.00～3.99	2
不明	18
計	68

表8 我溝北岡遺跡副葬品点数と墓数一覧

点数	墓数
0	8
1	4
2	10
3	14
4	11
5	4
6	5
7	5
8	3
9	2
14	2
計	68

大型厚葬墓と認められる。ただし、61号墓は単葬ではなく2人合葬墓であるため、1人あたりの副葬点数は7点となる。

この結果を踏まえ、当遺跡に、特定の土器の副葬点数をもって序列を付ける習慣が存在していたのかどうかを検討してみたい（表9）。対象としたのは、出土土器中の占有率が高い双耳壺と三足鉢である。前者は45点、後者は71点が確認される。そのうち、双耳壺に関しては、1点埋葬墓が37基、2点埋葬墓が4基となっている。41基の墓に45点が埋葬されたことになる。これに対して三足鉢は、1点埋葬墓28基、2点埋葬墓8基、3点埋葬墓2基、4点埋葬墓1基、8点埋葬墓1基、9点埋葬墓1基である。三足鉢は、41基の墓に71点が埋められていた。

我溝北岡では、裴李崗と同じく、三足鉢の多寡により死者の生前における社会上の格差を表現していた可能性がある。表9からは、1鉢墓、2鉢墓、3鉢墓、4鉢墓、多鉢墓の5階級、または3鉢墓と4鉢墓をまとめた4階級ぐらいが復元できる。そのうちの最上位にあたる多鉢墓には、三足鉢8点の34号墓（単人葬）と同9点の61号墓（2人合葬）が含まれる。34号墓と61号墓は、先ほど指摘したように、墓坑面積、副葬品点数ともに他をしのぐ、いわゆる大型厚葬

表9 我溝北岡遺跡双耳壺・三足鉢出土状況一覧

副葬 点数	双耳壺 墓数	三足鉢 墓数
1	37	28
2	4	8
3	0	2
4	0	1
8	0	1
9	0	1
計	41	41
	双耳壺 総数 45点	三足鉢 総数 71点

墓である。大型厚葬墓と多鉢墓が一致する現象がここでも観察された。続く4鉢墓は、副葬品点数7点（大きさ不明）の2号墓、3鉢墓は、副葬品点数8点、墓坑面積2.05 m<sup>2</sup>の31号墓、及び墓坑面積1.43 m<sup>2</sup>、副葬品点数5点の48号墓がこれに該当する。どうやら、莪溝北崗では、34号墓と61号墓に葬られた3人を頂点とし、以下に2号墓、31号墓、48号墓が連なるような、序列制度が存在していた<sup>(30)</sup>。

### 2-3. 石固遺跡

石固遺跡は、伏牛山の支脈から平原への移行地帯、南北を河川に挟まれた肥沃な土地に立地する。当遺跡は、1972年に農民が発見したことがきっかけとなり、1978年から80年にかけて調査と発掘が進められた。裴李崗文化以外に、仰韶期、竜山期、及びそれ以降の厚い堆積層が認められることから、石固は長期間に渡って住み続けられた集落であったことがあきらかである。裴李崗文化の堆積は、灰坑や墓の重複関係を基にして、Ⅰ期からⅣ期までの4段階に区分けさ

れている。墓は、石固Ⅰ期14基、Ⅱ期9基、Ⅲ期16基、Ⅳ期30基の計69基が検出された。石固Ⅱ期は裴李崗下層墓、Ⅲ期は裴李崗上層墓、莪溝北崗墓、沙窩李下層墓、石固Ⅳ期は沙窩李上層墓に概ね相当する。裴李崗文化の最も早い段階とされる石固Ⅰ期を含めると、同文化の全時代を網羅していることになる。

石固Ⅰ期の墓は長方形堅穴土坑墓である。向きは230度から280度のあいだ、葬法は単人の仰身直肢葬で例外は見られない。当墓群では、副葬品1点墓が14基中11基、全体の約80%を占めていた（表10）。しかも、そのうちの9基が双耳壺を単独に埋納した墓となっている。唯一、老年女性墓（88号墓）の墓坑面積が3.12 m<sup>2</sup>と平均の1.02 m<sup>2</sup>を大きく上回るが、墓群には、性差や年齢差をこえた均一性・等質性がうかがえる。双耳壺は石固Ⅰ期の主要な副葬品であった。死者の頭の左側に日常器の壺を1点置いて葬る、このような埋葬行為が平等に行われたのが石固Ⅰ期の村落社会であったと理解できる。

石固Ⅱ期になると、壁龕を穿った墓が2基出

表10 石固遺跡副葬品点数と墓数一覧

点数	墓数 (Ⅰ期)	墓数 (Ⅱ期)	墓数 (Ⅲ期)	墓数 (Ⅳ期)	計
0	1	2	5	15	23
1	11	2	3	5	21
2	2	3	1	2	5
3	0	0	2	2	7
4	0	0	1	3	4
5	0	1	3	2	6
6	0	0	0	1	1
13	0	1	1	0	2
計	14	9	16	30	69

(30) ここでいう墓葬間の序列が社会上の何を基準としたものであったのか、具体的にはわからない。しかもこれらの墓は、考古学の編年上同時期に属するとはいうものの、一連の葬送行為が、過去の埋葬事例を記憶している程度の時間幅のなかで行われたのかどうか不明である。あるいは、特別な埋葬方法に関しては、世代をこえて記憶が残されるような仕組みを持っていたのかもしれない。このような、いろいろな保留条件を付したうえでの格差の存在だということを記しておきたい。

現する。ただし、長方形堅穴土坑墓に仰身直肢の状態を単人を埋葬するという習慣に変化はなく、また特別に大きく作った墓は見受けられない。向きは217度から282度のあいだで統一されている。一方、副葬品の点数と墓数は、0点2基、1点2基、3点3基、5点1基、13点1基となり（表10）、墓の絶対数は少ないながら、そこには薄葬と厚葬の差があらわれてくる。そして、一部の墓に、石固Ⅰ期では未発見の三足鉢が入れられるようになる。ただし、双耳壺埋納墓が9基中5基あるのに対して、三足鉢埋納墓は3基と数が少ない。ちなみに、当期最大の厚葬墓である54号墓には13点の副葬品が埋納され、そこには三足鉢が3点含まれていた。

石固Ⅲ期の墓は、全てが長方形堅穴土坑墓である。墓の方向は246度から350度のあいだで、壁龕は見られない。そのかわり、16基中3基の墓において、側身の葬法がうかがえるようになる<sup>(31)</sup>。副葬品の点数と墓数は、0点5基、1点3基、2点1基、3点2基、4点1基、5点3基、13点1基である（表10）。石固Ⅱ期と同じく、副葬品5点墓以降、6点墓から12点墓が欠落し、いきなり13点の墓があらわれる（23号墓）。一部の墓に副葬品を多く添える厚葬の風は当期においても存在していた。

最後の石固Ⅳ期の墓は、単人の長方形堅穴土坑墓であることにおいて、大きな変化はうかがえない。向きも237度から311度、西南から西北の幅に収まる。壁龕を穿った墓が1例（84号墓）ある点も、石固Ⅱ期と同じである。ただし、副葬品の無い墓が増えていることと、側身葬が5基、俯身葬が1基含まれていることには注意してお

きたい。

副葬品の点数と墓数を見ると、0点15基、1点5基、2点2基、3点2基、4点3基、5点2基、6点1基である（表10）。石固Ⅳ期は、確かに、副葬品の無い墓が他の時期と比べて多い。そこで、副葬品0点墓の占める割合が時間の経過とともにどのように変化していったのかを観察してみると、Ⅰ期7.14%、Ⅱ期22.2%、Ⅲ期31.3%、Ⅳ期50.0%と徐々に増えていく様子があきらかになる。しかも、当期の墓群からは、墓坑面積や副葬品が突出した墓が出ていない。これは、Ⅱ期とⅢ期で見られた厚葬薄葬両極化現象からの後退である。かといって、皆を平等に葬る習慣に逆戻りしたというわけでもない。これは、副葬品を添えないことで下位墓に対する格差を表現したものと考えられる。石固Ⅳ期では、上位にある人物を厚く葬るのではなく、逆に、下位にある人物を極限まで薄く葬ることで、差異を表現していた<sup>(32)</sup>。

## 2-4. 水泉遺跡

水泉遺跡は、比高差40 mの河川南岸台地上に立地する。1971年に石器や土器が発見されたことを契機とし、その後、1976年に調査、1986年から89年にかけて4回の発掘が実施された。遺跡は、地層堆積及び灰坑と墓の重なり具合により、第一期、第二期、第三期の3期に区分けされている。墓は120基が検出された。それらは全て第二期文化に属している。

墓は全て西を向いており、報告者はそのなかに複数の墓列を確認している。それは、中間の空白地を隔て、西側に7列、東側に11列、計18

(31) 注11、河南省文物研究所、1987年報告、30頁には「側身5具」という記載がある。しかし、同報告、117頁、「表二 石固遺址墓葬統計表」によると、側身は11号墓、14号墓、15号墓の3基のみである。本論は、一貫して統計表の数値を使用している。

(32) 普通に考えるならば、時間が経過すればするほど格差は拡大していくものである。それが、このような消極的な格差表現に逆戻りしている。あるいは、環境の変化等による生産力の低下がこういう状況を招いたのかもしれない。

列の墓が、南北を軸として整然に並ぶというものである。そしてそこには意図的な規律性があったと指摘する<sup>(33)</sup>。確かに、当墓地では、墓葬間の重なりがほとんど見られず、墓が方向と距離感を意識しながら掘られていった状況がうかがえる。

当遺跡の墓は皆、長方形堅穴土坑墓である。葬具は持たない。単人の仰身直肢葬を主流とするが、120基中3基が2人合葬墓となっている。墓坑長平均値は1.93 m、墓坑幅平均値は0.89 m、墓坑面積平均値は1.72 m<sup>2</sup>である。裴李崗の墓と比較すると、やや小ぶりの作りである（表6）。ただし、副葬品点数は、平均が4.38とこれまで紹介してきた5遺跡のなかで最も多い数値を示す。

副葬品点数と墓数の関係を調べてみると、0

表11 水泉遺跡副葬品点数と墓数一覧

点数	墓数
0	13
1	16
2	8
3	16
4	17
5	16
6	13
7	7
8	3
9	2
10	2
11	2
12	3
19	1
31	1
計	120

点墓から6点墓まで、2点墓が8基であることを除き、いずれも10基台を維持する（表11）。副葬品0点から6点までの墓99基で全体の82.5%を占めていた。それをこえると墓の数は一桁に落ち込む。表11を見ると、7点7基、8点3基、9点・10点・11点2基、12点3基、19点1基、31点1基となる。副葬品が31点出土した29号墓は、坑長2.27 m、坑幅1.5 m、面積4.08 m<sup>2</sup>を計測する大型墓である。ここには、35～40歳の男性が葬られていた。29号墓は、当墓地で唯一の大型厚葬墓であった。

ここで、特定の土器が、数を意識して埋葬されているかどうかを観察してみたい（表12）。副葬土器のなかでは双耳壺が最も多く、三足鉢がこれに続く。数は、残器と報告されるものも入れて、前者109点、後者38点である<sup>(34)</sup>。双耳壺は109点が87基の墓に、三足鉢は38点が30基の墓に埋葬されていた。墓1基あたりの平均点数は、前者1.25、後者1.27である。両者に大きな違いはない。

三足鉢の出土状況を子細に観察してみると、

表12 水泉遺跡双耳壺・三足鉢出土状況一覧

副葬 点数	双耳壺 墓数	三足鉢 墓数
1	73	25
2	10	3
3	1	1
4	2	1
5	1	0
計	87	30
	双耳壺 総数 109点	三足鉢 総数 38点

(33) 注12、中国社会科学院考古研究所河南一隊、1995年報告、46頁、参照。

(34) 注12、中国社会科学院考古研究所河南一隊1995年報告によると、第二期文化の土器数は、灰坑、文化層出土例も含めて、双耳壺58点、三足鉢30点となっている。筆者が同報告の「水泉遺址墓葬登記表」より算出した数字と大きく異なるのは、墓に残器が多かったゆえんである。また、双耳壺109点のなかには、三足壺2点、圈足壺2点が含まれている。どちらも三足と圈足を除いた形態は双耳壺と同じである。

先ほど指摘した大型厚葬墓の29号墓からは4点  
が出土している。これを筆頭に、三足鉢3点の  
墓が1基、2点の墓が3基、1点の墓が25基と  
並ぶ（表12）。三足鉢を2点以上埋納した墓の  
副葬品総点数は、それぞれ、31点（三足鉢4点  
墓）、6点（三足鉢3点墓）、8点、9点、7点  
（以上、三足鉢2点墓）というように、平均の4.38  
をこえている。

土器の点数に差を付ける現象は、双耳壺の方  
にもうかがえる。まず、唯一の大型厚葬墓であ  
る29号墓が、5点の双耳壺を有し、1位に位置  
づけられる。以下、4点2基、3点1基、2点  
10基、1点73基と続く（表12）。また、双耳壺  
を2点以上埋納した墓の副葬品総点数は、31点  
（5点墓）、19点（4点墓）、11点（4点墓）、10  
点（3点墓）、さらに、12点、10点、8点、7点、  
6点、5点、2点（以上、5点墓3基、2点墓  
2基、他1基、計10基）、となっている。

当遺跡においては、三足鉢と双耳壺を最大数  
副葬した墓が大型厚葬墓と一致すること、三足  
鉢埋葬墓と双耳壺埋葬墓の副葬品点数が概ね平  
均以上であること、以上の2点から、裴李崗や  
莪溝北崗ほど明瞭なものではないにせよ、土器  
の埋葬点数によって故人の格をあらわすゆるや  
かな制度が存在していたといえるであろう。

しかし、これをもって、裴李崗や莪溝北崗と  
同じような、個人の生前における位階づけを行  
うための組織的埋納制度が存在したと断定する  
には証拠が不足している。というのは、当該土  
器埋葬墓のなかで、1点墓の占める割合が水泉  
は多いのである。具体的に見ると、裴李崗  
50.0%（三足鉢）、莪溝北崗39.4%（三足鉢）、水  
泉83.3%（三足鉢）、83.9%（双耳壺）という数  
値が算出される。水泉に1点墓が多いというこ  
とは、他の2遺跡と比べて、平等への志向がそ  
れだけ強かったことを意味しよう。もちろん29  
号墓のような、突出した大型厚葬墓が存在する

ことは事実であるが、それは他の遺跡でも同様  
に観察されることである。ひとまず、水泉では、  
特定の土器をもって階層序列を表現しようとする  
動きは未だ萌芽状態にあったと結論づけてお  
きたい。

## おわりに

これまで、裴李崗遺跡、及び裴李崗文化の主  
要な4遺跡の墓群を観察、分析することで、新  
石器早期の社会集団において、日常生活で普通  
にあらわれてくるような違いをこえた格差が存  
在したのかどうかを検討してきた。

その結果、いずれの墓群においても、取り巻  
く状況に違いはあるものの、墓坑面積と副葬品  
点数の抜きこんでた墓が存在していたことがあ  
きらかとなった。裴李崗は120基中3基（15号墓・  
27号墓・38号墓）、沙窩李は32基中1基（19号墓、  
これは石器23点と土器1点が出土した特殊な墓  
である）、莪溝北崗は68基中2基（34号墓・61  
号墓）、石固は69基中2基（54号墓・23号墓、  
54号墓は破壊されているため正確な大きさは不  
明である）、水泉は120基中1基（29号墓）が大  
型厚葬墓と認識できる。

ただしこれだけでは、集落のまとめ役、狩猟  
採集や農作業の指導者、よき相談相手など、村  
人から慕われ尊敬を受けていた人物がたまたま  
手厚く葬られたという状況が推測されるにとど  
まる。もう一步踏み込んで、そこに格差や階層  
性の誕生を見るためには、別の新たな要素が必  
要とされる。

本論では、それを裏付けるものとして、特定  
の土器の埋葬点数を被葬者により違える習慣が  
あったこと、そしてそこに生前の人物を序列化  
する制度が存在していたことを推測した。この  
ような状況は裴李崗遺跡に最もよくあらわれて  
いた。裴李崗の墓においては、45名の被葬者に  
対して、三足鉢の埋納点数を、18点、13点、4

点、3点、2点、1点というように意図的に変えていた様子が観察された。しかも、三足鉢が多い上位3基の墓は、同時に大型厚葬墓であった。これは、三足鉢の多寡をもって、人物の階層化を行っていたことのあらわれと考えられる。

同様の現象は、裴李崗文化の他の遺跡、莪溝北崗や水泉でも観察された。水泉遺跡の分析結果は、裴李崗や莪溝北崗ほど明瞭なものではなかったが、三足鉢と双耳壺、両器種にこのような傾向が見られたことは注目すべき点であり、ここには、特定の2種類の土器の副葬数をもって階層を表現しようとするゆるやかな傾向があったことに注目した。

また、裴李崗文化のほぼ全時代を覆う石固遺跡においては、一端、厚葬薄葬両極化の風が出現しながら、最終段階で副葬品の無い墓が極端に増える、いわば逆格差の現象に注目した。これは、序列の付け方の別の方法としてとらえることができるであろう。

新石器時代において、村落社会の秩序を維持しながら集団生活を続けていくためには、現世と同様の規律（礼制）が反映された埋葬制度を確立する必要がある。現世と来世の別が今よりも不分明であった当時においては、とりわけ死後の世界の秩序維持に腐心したことであろう。埋葬行為や墓地の造営は、あの世における死者の安寧を願うというよりも、この世における村の秩序を維持していくための装置として働いていたに違いない。

秩序維持のためには、現世と同じような秩序だった社会を死後の世界にも表現する必要がある。いうなれば、死後の世界が現世の鏡となる必要がある。そのためには、例えば、特定の人物に奢侈品や希少性のあるものを葬るという方法がひとつある。裴李崗文化の賈湖遺跡では、

大型厚葬墓に亀甲、骨笛、骨叉形器といった特殊遺物を埋葬することで、格差上最上級に属した一団を区別していた<sup>(35)</sup>。賈湖では、現実の社会生活において、亀甲、骨笛、骨叉形器が、威信を示すための道具とされていたゆえんである。

賈湖と異なり、裴李崗の場合、特定の人物の地位を示すような奢侈品や希少品はほとんど出土していない。そのかわり、現世における当該人物のおかれた立場をあらわす別の方法を編みだしていた。それは、特定の土器の副葬点数に基づく格付け行為である。副葬される土器が日常器である以上、それを単に埋納するだけでは何も表現することができない。ものそのものの属性や特殊な形態に負うのではなく、数量をもって格差を付けたところに、裴李崗遺跡群の特徴があるといってよいだろう。河南省中央部の新石器早期の村落社会では、後世の「列鼎制度」を想起させるような仕組みを使うことで、未熟ながらも制度化された階層秩序維持装置が機能していたと考えたい。

## 図表出典

図1-1 『考古学報』1984年第1期、40頁、図14-11

図1-2 同上、37頁、図13-6

図1-3 同上、37頁、図13-19

図1-4 同上、41頁、図15-15

表1～表12 筆者作成

(35)注7、小川誠、2010年論文、参照。